MMORPG的ななにか

STORM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＭＯＲＰＧ的ななにか

【Ｎコード】
Ｎ１７４７Ｈ

【作者名】
ＳＴＯＲＭ

【あらすじ】
自分が誰かすら分からない男が急に女神に呼び出された。そしてジョブを選択しろと命令される。早くもこれはＭＭＯＲＰＧっぽいことに気づいた男はなんだかんだでジョブを選択し、自らの名を「アイン」と名づけ、旅に出る。

第1話　無責任な女神（前書き）

こんなものを書いておきながらＭＭＯＲＰＧは長続きしたことがないです。

第1話　無責任な女神

オレが初めて目を開けて、その瞳が映したものは女神だった。
「お前はこの大陸を救済せねばなりません」
しらねーよ。
「とりあえず、ジョブでも選んで」
口調変わった!?
「つか何なんだよ、オレ」
「・・・勇者じゃない？あたしだってこんな損な役回りやりたくないわよ、女神なんて」
「なんつー女神だ」
と、言いつつも女神の用意したカタログをみる。
「すげぇ、召喚師とかカッコいいじゃん」
「厨二病・・・」
うるせぇな！
んなこと言ったら全部厨二病なジョブしかねーよ！
つか「商人」ってジョブなんだよ!?
なんだ、どうやって戦えと!?
戦士とかある時点でこの世界はもっぱらＲＰＧものということは理解していたがな。
「商人とかなんだよ」
「ジョブならまだあるわよ、映画監督とか」
「映画とってりゃいいのか？」
「え、しらない」
無責任な女だ。
「無難に戦士ね」
「ちょ、召喚師がいいんだけど」
「あ、召喚師は魔法使い系のランク２以降じゃないとジョブチェンジできない」

「ならなおさら戦士とか意味わかんねぇよ。なぜ魔法使いじゃないんだ」
「だって魔法使いだったらあたしが魔法教えなきゃなんないじゃん、疲れるじゃん」
「しらねーよ、こっちはいきなり召喚されて意味も分からずジョブチェンジっつーかジョブ選択に移行させられてるんだぞ！？」
・・・もう剣準備されてるし。
「まあ、ジョブチェンジはあたしの監督下じゃないから、ジョブチェンジするなら他の女神のところでやってくんない？あたしんとこローブとか用意してないし」
マジで戦士にしたいんだな、こいつ・・・。
「ちなみに、戦士からはどんなジョブに派生できるのか？」
「この表をみなさい」

戦士系列

ランク１：ファイター
ランク２：ファイター→ソルジャーｏｒナイト
ランク３：ソルジャー→カオスソルジャーｏｒブレイダー、ナイト→ロイヤルナイト、パラディン
ランク４：ブレイダー→ダークブレイダー、パラディン→アークパラディン
ランク５：カオスソルジャー→ロストスレイヤー、ダークブレイダー→ドラゴンキラー、ロイヤルナイト→ロードシェヴァリエ、アークパラディン→ラストガーディアン
ランク６：ファイター→バーサーカー

「ちょ、ランク６何！？バーサーカー何！？」
「言わずと知れた最強の戦士系ジョブ。習得する特技、「キルゼムオール」は敵味方関係なしに滅ぼすといわれている」

ただ単に皆殺しを英語にしただけじゃねーか！
しかもその他のジョブの名前も凄まじく厨二病。
「いいよ、もう戦士で！最初はファイター？」
「ファイターは序盤ではなかなか強いよ、でもある程度敵が強くなってくると歯が立たないんだよね、そのあたりでもうランク２に行けるだろうし・・・でも、そこを乗り切ったものだけがバーサーカーになれるんだよ」
知るか！
バーサーカーなんてありえねぇだろ！？
「ちなみに、歴史上バーサーカーになったものは一人もいない。なお、レベルを戻して元のジョブに戻してジョブチェンジしなおしたりもできるよ。まあ、ジョブ変えてから元のジョブにすれば変えた時のレベルと同じだよ」
まずレベルとか言っちゃってる時点でなんかアウト。
「最初の武器、最強の剣となまくらの剣、ふたつあるけどどっち使いたい？」
「はぁ？最強の剣？んなもんあるんだったらさっさとよこせ」
「でも、レベル２以上じゃないと触れないよ」
「・・・今レベル１なんだけど」
「残念、持ち運びできませんね。というわけでさっさとなまくらの剣持ってけ」
「なんだよ、その命令口調。そのくせ革の鎧とか防具はしっかりしたものくれるんだな！」
「せめてもの救いよ！」
「はぁ、面倒だが、たまには人助けもいいだろう」
オレは腰の鞘になまくらの剣を差した。
「んじゃ、いてら」
「てめーにはもう二度と会いたくねぇわ！」

こうして始まった、オレの物語。
ちなみにオレの名前・・・最初に入力するはずなんだがなぁ・・・。
まあ、「アイン」でいっか。
ドイツ語で１って意味だ。
以上。
面倒なんでこれから会う奴の名前全て数字で言っていこう。
どっかの国の言語に直して名前っぽく見せてな！
たぶん次は「ツヴァイ」か「ディア」か・・・そこらが妥当か。

アイン
ファイター
ＬＶ１
武器・なまくらの剣
盾・なし
兜・なし
鎧・革の鎧
腕・革の小手
脚・革のブーツ
装飾品・なし

これが現在のステータスだ。
んなことはどうでもいいな。

というわけで、女神に言われたとおり大陸を救済することにしてみた。

第1話　無責任な女神（後書き）

酷いですね、はい。

第2話　はじめての狩り

「すげぇ、人がいっぱいいる！」
オレと同じような格好をした人という意味で。
そしてなぜか一般人の方が少ないという罠。

オレは女神に町に飛ばされた。
だいたいここで指導係が数人いるんだよな。
チュートリアル受けないとクエストを受けれないってやつだな。
チュートリアルが最初の必修クエストってやつだ。

「長いのでカットさせてもらう」

と、言うわけでカットした。

とりあえず、マップに出てみた。
スライム状のモンスターがいた。
「これって明らかに倒さなきゃいけないってやつだよな」
名前は・・・プリン。
なんか結構普通。
「よし、こんなやつ、スキルで蹴散らしてやるＺＥ☆」
と、オレは修得しているスキルの発動に入った。
な、何！？
スキルを一つも覚えていないだと！？
「まだレベル１だもんなー」
そう言いつつ、剣で切り裂いてみた。
・・・。

「斬れねぇ」
サッスガなまくらの剣！
切れ味が半端なく悪いぜ。

そうこうしているうちにプリンが攻撃してきた。
自らの体の一部を飛ばしてくるという攻撃方法だ。
「うわぁ、気持ちわりぃ、ヌメッとしてやがる・・・これって明らかに物理ダメージより精神ダメージの方が高いわ。しかもなんかＨＰ減ってないし」
体の一部を失ったプリンはまだそこに佇んでいた。
・・・ん、体の一部を失った？
「そうか！」
オレはなまくらの剣で、斬るようにではなくたたきつけるようにプリンを攻撃した。
プリンの体は徐々にグチャグチャになって、最終的に粉々になって動かなくなった。

アインは１５の経験値と１０ゴルを手に入れた。
「案外もらえるんだな、経験値って。てか金の単位ゴルって言うんだ、この世界。てかゴルってネーミングセンスなさすぎだろ」
さてと、レベルアップまであとどれくらいかな。

次のレベルまで：ＥＸＰ２３５
「死ねくそやろおおおおおおおおおおお！！」
オレは叫んだ。

ぶっちゃけオレはレベルが上がるまでスキルの使用が禁じられているのが許せない。
というわけでオレはこの世界のマニュアルを読みなおしてみることにした。

もしかしたら金で技を修練させてもらって修得するのかもしれないし、もしかしたら敵を倒した時に手に入るＳＰとやらを消費して技を習得するのかもしれない。

・・・マニュアルを読んだ結果。
ＳＰとは、満タンになれば一時的に所謂リミットブレイク・・・オーバーリミッツ・・・まあ、どれでもいいや。
とにかく一時的に隠された力を解放できる。
超必殺技やら秘奥義とかは使用できるとかは書いてはいなかった。
そして待望のスキルの修得。
能力系のスキルはレベルの上昇で修得するようだが、技・魔法系のスキルは全て現金を支払って町に住む教官から教えてもらうそうだ。
修得はたった一瞬で済む。
非常に便利なシステムである。
オレは何の練習もしなくても金さえ払えば気づいたら修得しているんだからな！
まあ、本当に強い技はレベルがそれなりに上がってからじゃないと修得できないってやつもある。

現在の所持金は１０ゴル。
まあ、略して１０Ｇ。
これからは金額の後につけるのはＧで統一することにする。
単体で呼ぶときはゴルで。

「さすがにこんなんじゃ技変えるわけねぇよなぁ」
と、言うわけでプリンを３０体ほどグチャグチャに潰した。
んで、レベル２になった。
レベル２になったらなんか強くなった気がした。

そしてランク２のジョブになれるまであとレベルが１３必要。
ランク６のバーサーカーになるまでレベルがあと９９７必要。
・・・やる気失せるな、レベル９９９とか。
ちなみにレベルやＨＰなどのステータスに上限はないらしい。
また、武器や防具も＋補正を無限にできる。
だから革の鎧＋１０００と魔王の鎧は革の鎧＋１０００の方が強いのだ。
普通に魔王の鎧＋１０００にすればいいとも思うが。
強化には特殊なアイテムと、お金が必要らしい。

第3話　浜辺でサハギンを狩る

町に戻って回復アイテムを購入しているときだった。
明らかに商人と思われる冒険者がいた。
なんか弱そうな風貌だ。
馬車に乗ってフィールドにでていったため、オレも見てみることにした。
「商人ってどうやって戦うんだよ」
フィールドに出てすぐのところに、プリンが現れた。
オレは隠れていたが、商人の前にプリンが立ちはだかった。
「ちょ、危ないんじゃね？」
まあ、プリンなんてザコ中のザコだが。
そう思いきや、商人は馬車でプリンをひき殺した。

「・・・」
商人つええええええええええええええええええええええええ！！
何あれ、マジで何！？
上位ランクジョブが気になったため、カタログで商人の上のランクを見てみる。

商人系

ランク１：行商人
ランク２：行商人→悪代官ｏｒ店長
ランク３：悪代官→悪の大王、店長→成金
ランク４：悪代官→密輸王、店長→大株主
ランク５：悪の大王→悪の大魔王、密輸王→麻薬王、成金→大富豪、大株主→石油王
ランク６：行商人→マーキュリー

何たる職業表。
てかやっぱりランク６はとんでもないんだな。
バーサーカーよりはインパクトは薄かった。
ちなみにマーキュリーとは商業の神様である。
それと同時に英語で水銀という意味でもある。
スペルは同じかどうかは知らん。

「オレも負けてらんねぇな」
折角レベルが２になったんだ。
もう少し強そうな敵と戦ってみよう。

少し進んだ先に海があった。
海のところには二足歩行する魚人っぽいものがいた。
ん、こいつは・・・。
こいつの名前はサハギン。
まあ、ベタだね。
当然の如く銛を持っている。
「死ね！」
なまくらの剣、流石だね、刃物としては使えないけど鈍器としては一流。
サハギンが刺身ではなくたたきになった。
肉片を見てもあんまりおいしそうじゃなかったから拾わなかった。
そして気になる経験値は！？

獲得経験値：２５

プリンよりは多いな。
まあ、そりゃそうか。

強さはあんまり変わらなかったけど。
ついでに２０Ｇも手に入ったし。
それに銛も落としていった。
てか、たたきにしたんだから武器は残るわな。
一般的なゲームで敵が持っている武器を奪えないのが謎である。
一部、奪えるゲームはあるが。

アインは「サハギンの銛」を手に入れた。

「武器の種類は槍か。一応ファイターは装備できるみたいだな。なまくらの剣よりはマシか」
オレは銛を装備した。
ＡＴＫが１４から２０に上がった。
ＤＥＦが１４から１６に上がった。
ＳＰＤが１４から１２に下がった。
ＨＩＴが１４から１２に下がった。

攻撃防御に特化するようだな。
スピードや命中率は下がってしまったが、それでも防御力と攻撃力はあがった。
とくに攻撃力の上昇はなかなかだ。

そしてその銛をオレはふるう。
サハギンの群れを一気に串刺し、あまりの強さに驚愕した。
「サハギンとったどー！」
昔、このネタ好きだったなぁ・・・。
「つか銛強い」
序盤武器では相当強いだろう。

サハギン狩りに熱中していると、浜辺に洞窟があることに気付いた。
どんな敵がいるのだろうか。
「・・・暗いな」
ちらっと覗いてみたが、中は光を通さない漆黒の闇だった。
こんなところからモンスターに襲われたらひとたまりもない。
てか、死ぬ。

オレは浜辺に引き返した。
「なっ！？」
色違いのサハギンがいた。
「あ、あれは・・・サハギンリーダー！？」
サハギンリーダーはなんかサハギンよりも強い。
以上。

「今のオレじゃ勝てない！攻撃力、鱗の堅さ等、サハギンの銛や今の防具、オレのレベルじゃ敵いはしない！！」

オレは逃げた。

だが、それも無駄だった。
サハギンリーダーは銛を投げてきた。
しかも何回も。
「ちょ、銛投げるな！しかもお前何本持ってんだよ！銛！」
サハギンリーダーってこんなに銛持ってんの？！
てかどっからだしてんだよ！！
「ぐおおおおおおおおおおおお！！」
オレの脚に刺さった。
あ、歩けない・・・。
「うひゃ、ぎゃあああああああああああああああああああああ！！」

ＨＰ０

どうする？

１　助けを待つ

２　諦めてホームポイントに戻る

オレは力尽きた。

そして助けが来る気配ものなかった・・・というより仲間すらいなかったので、ホームポイントに戻った。

第４話　打倒サハギンリーダー

サハギンリーダーが強すぎる。
確かあれはレアモンスターだ。
出会える時間帯とか決まっているはず。
・・・奴を倒すためにはまず、スキルを修得しなければ。
と、言うわけで教官の元へ行ってみることにした。

「すいませーん」
「あ？」
感じ悪っ！！
「スキルを修得したいのですが」
「スキル選んで金払え」
教官がカタログを投げてよこしてきた。
この世界カタログ好きだなぁ。

現在の予算は６００Ｇ。
所持金は７５０Ｇ。
これで買えるスキルを選ばなくちゃな。
これくらいあれば安いスキルは買えるだろう。

「一刀両断」

これが一番安いか。
２０００Ｇ。

「たけぇよ！！」
どんだけスキル覚えさせたくないんだよ！！

しかも魔法使いのスキルを見れば基礎魔法とか１００Ｇとかで買えるじゃねぇか！

あ、こっちの方が安い。

「ダッシュ」

走るだけ・・・移動速度は凄まじいらしい。
そこからの攻撃で相手を翻弄する。
１５００Ｇ。

「それでもたけぇよ！！」
普通に高い。
何これ。

ん、もっと安いの見つけた。

「二連斬り」

いかにも安そうなスキルだ。
１２００Ｇ。
どうしてこんなに高いんだ！

「・・・あ、これは・・・鈍器殴打」
な、何！？
説明には剣などの斬撃武器で敵を殴る。
切れ味の悪い武器ほど威力が増す。
「なまくらの剣を使えばいいのですね、分かります」
なまくらの剣が妙に役に立つ件について。
それで、気になるお値段は？

・・・６００Ｇ！
か、買える！！
「買うしかない！」
と、言うわけで金を払った。

そしてオレは一冊の本を手渡された。
「何これ」
「これ、ここにやり方が書いてあるから。それ見ればたぶん覚える」
たぶん！？
たぶんってなんだよ！
無責任すぎる！！
「それじゃ、用がないなら消えろ」
ウザッ！
教官ウザッ！！
何が教官だ！
何も教えてねぇじゃねぇか！！
まあ、こんなオチは読めてたけどな！
女神からしてあんな態度だ、こんなことが起こってもおかしくはない！
「ちっ、仕方ねぇ」
オレは本を読みながら教官の下から去った。

本に書いてあること。
スキルと言うくらいだから今まで出番がなかったＭＰを使うはず。

・・・ん、何！？
ＭＰ・・・じゃない・・・だと！？
ＡＰ！？
なんだＡＰって！
何の略だ！？
ＭＰはマジックポイント、ＳＰはソウルポイントとマニュアルには書いてあった。
では、ＡＰは・・・アクティブポイント・・・か。
ＨＰは無難にヒットポイントか。
ん、ステータスにＬＰってあるぞ？
ライフポイントの略のようだが、ＨＰとどう違うんだ？
オレはマニュアルを読みなおしてみる。

ライフポイント。
自身の生活力。
ＬＰが高ければ高いほど、ペットや配偶者、子供を養うことができる。
ライフって生命じゃなくて生活って意味の方ですか・・・。
ちなみにペットがいれば戦闘に参加してもらえるらしい。
配偶者、子供も戦闘に参加するらしい。
まあ、どうでもいいが。
余計な設定詰め込みやがって。
だから前作もカオスなことに・・・っと、裏話は厳禁だ。

とりあえず、オレのＬＰは６である。
ペットを作るには３００ＬＰが必要だ。
３００には程遠いので、オレは一人で戦うことにする。
今は打倒サハギンリーダー。
レアモンスターだけに、落とす銛も、「サハギンの銛」ではなく、「サハギンの銛・改」らしい。

サハギンの銛の倍くらい強いので、序盤に倒しておけばかなり楽に進むはず。

さあ、オレのスキルを見て驚くことだな、サハギンリーダーよ！！

オレはサハギンの出る浜辺に向かった。

「いたぜ、サハギンリーダー！強くなったオレの力を見ろ！」
オレはなまくらの剣を構えた。

その瞬間だった。
見覚えのある馬車がサハギンリーダーを踏みつぶし、サハギンリーダーどころかサハギンの銛・改までも粉々にして走り去っていった。

「・・・」

恐るべし、商人。

第5話　決戦、ビッグボア！

サハギンリーダーが商人に轢き殺されてから、オレはずっとやる気がなかった。
あんだけやる気があったのに先に仕留められるとは、やる気が失せるのも無理はない。
と思う。
そんなとき、クエストが追加された。
「ん・・・新しい街に行けるクエストか」
早いものよ、成長とは。
あのあとやる気もなしに適当に狩りを進めていたら気づけばレベルも１０になっていた。
どうやらレベルが１０になれば、新しい街に行けるようになるらしい。
ただし、何やら関門があるようだ。
「えっと、新たな街へ行くにはこの町の町長に認められる必要があるのか。そしてそれがこのクエスト・・・と」
新たな街へ行けば一緒に冒険してくれる人もいるかもしれない。
オレはそんな熱い希望を胸に、クエストを引き受けた。

クエスト内容は次の街へ行くため、町長が指定するモンスターを倒すこと。

オレが倒すモンスターは、「ビッグボア」

ビッグボアはボアよりも巨大なボア。
ボアは蛇のモンスターである。

近くにボアを潜ませているらしく、低いレベルで倒すのは困難。
モンスター図鑑を見る限り、とてつもなく強く感じられる。
武器はサハギンの銛となまくらの剣しかない。
なまくらの剣で、スキル「鈍器殴打」が使えるが、その程度の技で勝てるわけがないだろう。
攻撃を回避する技能、そして強力なスキルが必須となるだろう。
サハギンの銛より強い武器はこの村では一応買うことができるが、万単位の金額がとられるため、やめた。
何故この村の武器屋は「銅の剣」よりもいい武器が「死神の鎌」やら「ドリル」やら強そうなものしか売っていないのだろうか。
しかも値段が銅の剣よりも2桁もちがう。
初心者にこんな武器が買えるわけないだろう！
と、オレは横を向く。
な、何っ！？
オレの目の先には武器以外すべての装備がオレと同じ奴がいた。
奴の手にはドリル・・・。
な、なんだってー！？
あいつどんだけやりこんでんだよ！？
プリンを５０００体以上倒さないと買えないのに！！
よくそんなにヤル気あるな！
オレにはねぇよ！

と、言うわけで現在の装備で戦うことにします。
武器はなまくらの剣とサハギンの銛を併用、防具は初期装備。
あの女神が案外いい防具をくれたため、変える必要がなかった。
そしてオレは新しいスキルを修得してきた。

ふふふ、オレに勝ち目はない・・・じゃなくて、敵に勝ち目はない！

オレはビッグボアがいるらしい洞窟へ向かった。
ビッグボアの牙を取ってくればいいらしい。
オレは息を潜めて奥へ進んでいった。
「ビッグボア・・・どんなモンスターなんだ？」

そんなとき、脚にコツンと、何かが当たった。
「・・・ボアか？」
足元には小さな蛇がいた。
大きさは膝から下くらいの脚の長さ。
おそらくこいつがボアだろう。
「こいつは本物の見本になるかもしれないな」
と、思ったのでオレはなまくらの剣で殴りつけて殺した。
そして肩にかけた。

「さて、ビッグボアはどこだ」

・・・数時間探したが、一向に見つからない。
それどころか最初に見つけたあいつ以外にボアすら見つからない。
どこ行ったんだ、ビッグボア。
やる気もなく、足もとに転がっていたミミズ大のモンスターを踏みつぶしながら歩いた。
でも、腹が減ったので一度町に戻ることにした。
ビッグボア探しはまた明日だな。

そうして、オレは町へ戻った。
町に戻った瞬間、イベントが発生。
な、何！？
「よくぞビッグボアを倒しました」
「え？」
「肩にかかってるじゃないですか」
・・・こいつかよ！？
てっきりこいつがボアかと・・・。
「しかもボアもとんでもない量処理してくれたようで」
・・・まさかあのミミズ大のモンスター？
華美しすぎだろ、モンスター図鑑！
「あなたには町通行証を進呈します」
「あ・・・ありがとう」
何故か素直に喜べなかった。

第6話　なまくらオークション

新たな町に徒歩で行くことができる。
だが、んなことしてたら日が暮れそうで。
と、言うわけで馬車で行くことにした。
値段は３００Ｇ。
初心者にも比較的良心的な値段だと思う。
運営、よくやった。

しばらくして、バスがやってきた。
・・・馬車じゃない！？
なんだこの世界！
妙に古代だったり、妙にファンタジーだったり、妙に現代社会だったりするぞ！？
何したいんだ！？
まあいいや。
なんでも。
「えっと、次の町行きか。値段は・・・２２０Ｇ・・・馬車より安っ！！」
馬車なんだよ！
オレバス乗るよ！！
オレは通行証を運転手に見せる。
「兄ちゃん、よくビッグボア倒したな」
「いや、あんなのすぐ倒せっから」
「皮肉なものよ、あっしが冒険者をしていたころはビッグボアすら倒せなくてな」
あんなの倒せねぇのか！？
「そもそもビッグボアがどんなのか見たことなくてな」
ああ、なるほど。

「未だに見たことなくてな」
かわいそうに、死骸くらい見せてやりたかった。
あんなのザコいモンスターだということを知ったら、この運転手はどうするだろうか。
「それでもあっしは次の町へ行きたかった。だからこうして運転手をやってるのさ」
「か、カッコよすぎるぜ・・・運転手！」
顔的な意味で。
ちらりと見えた素顔が妙にカッコよかった。

と、乗る人もいないバスで運転手の昔話を聞きながら町へ向かった。
運転手曰く、冒険者時代よりも給与がいいらしく、今から冒険者に戻る気はないらしい。

どうしよう、オレもバスの運転手にジョブチェンジしようかな・・・。

そう考えているうちに到着した。

「兄ちゃん、あっしの夢を、引き継いでくれ」
・・・運転手・・・。
「分かった、オレが必ず、運転手の夢を叶えてやる！」
「富豪冒険者に！」
え？
「最強の冒険者じゃないの？」
「あっしは金さえ入ればどうでもいい」
・・・運転手、オレは君を勘違いしていたようだ。
てか・・・オレが富豪冒険者になったところで運転手・・・関係なくね？

辿り着いた町はとても綺麗だった。
古びた建物が歴史を感じさせる。
「おお、ロンドンみたいじゃないか！」
行ったことないけど。

オレが街並みを見ながら歩いていると、誰かにぶつかった。
「いて」
そしてぶつかった人を見る。
見るからに強そうな人でした。
武器はそいつの身長をはるかに超える大剣。
防具もガチガチに固めた鉛色の鎧であることから、ブレイダーかと思われる。
こ、殺される・・・。
こんな奴敵にしたら勝てないって！
「その剣、どこで手に入れた」
「え？」
「その剣はなまくらの剣だろう？」
「え、まあ・・・そうだけ・・・そうですけど」
「オレに１０万Ｇで譲ってくれ」
え？
「今なんて・・・」
「１０万じゃ安いか、１５万でどうだ？」
な、何故なまくらの剣がこんなに高く売れるんだ？

確かになまくらの剣はなまくらなりに打撃武器としてかなり多用してきたけど・・・。
「な、何でそんなに高く買い取ろうとするんだ？」
「なまくらの剣の本当の価値を分かっていないのか？」
「分かってない・・・と思う」
「なら、教えてやろう。なまくらの剣は特殊なアイテムを使えば＜皇帝の剣＞という全レベル対応の強力な剣に進化するのだ。そして皇帝の剣固有スキル、エンドレススラッシュが使える」
なんだその強そうな技は！
こんなに強かったのか、なまくらの剣！
「それで、どこで手に入れたんだ？」
「え、初期装備だったけど」
「しょ、初期装備だと！？」
「え、みんなこれじゃなかったの？」
「オレの初期装備は木刀だった」
・・・なにっ！？
「そ、そんな・・・あのクソ女神がこんなに良心的だったなんて！！」
そっちに驚くのかよ、と自分に突っ込みを入れてもう一度剣士の方を向く。
「オレはなまくらの剣なら１００万でも買い取る！」
ん、もしかしたら・・・。
「金あるの？」
「今は１８万しかない」
あおればなるかもしれんな、仲間に。
「ん・・・それじゃ、これくれた女神でも探すか。量産のために」
「む、ならばその旅にオレも連れて行ってほしい」
ふ、計画どおり！！
「分かった。よろしくな！」

「おう」
「んで、あんたは何て呼べばいい？」
「ソーンと呼んでくれ」
「それで、何語で2って意味だ？」
「よく2って分かったな。タイ語だ」
約束通り、次の出てくる名前は2の意味だ！
「そうか、オレはアイン。ドイツ語で1って意味だ」
自己紹介をして、フレンドカードを交換した。
「これさえあればいつでもオレを呼べるだろう」
「フレンドカード・・・そうか、これがオレたちの絆を結ぶカード！」
「いや、絆も何もまだないから」

そんな感じで、友達がひとり、増えたのであった。

第7話　執念深き神話の怪物

「すっげぇ、これが砂漠か！」
どうやら辿り着いた町は砂漠に隣接していたらしい。
ソーンに連れられて砂漠の真ん中にある洞窟を目指すそうだが、今のレベルでは多少心配な難易度らしい。
その洞窟の先からまた違った場所へ行けるようだが、ソーンでも困難らしい。
途中にボスがいるらしく、そいつに見つかったらお手上げのようだ。
レベルがオレと１０も離れているソーンですらだ。
まず、何事もレベルが大事。
その洞窟へ向かう前に砂漠でレベルを上げていくことにした。

砂漠には奇妙なモンスターがたくさんいた。
翼がひとつしかないのに飛べる鳥、本体がハサミの蟹、ただ単にでかいミミズ。
しかも全部弱い。
鳥なんてその翼をもいでしまえばもう袋の鼠。
蟹はハサミを切られてしまえば動くことすらできない。
ミミズは反撃すらしてこない、存在意義の全く分からないモンスター。
なんの面白みもない。
「でも、精一杯生きているんだよな、こいつら」
と、表面ばかりの憐れみを見せてみる。
経験値が案外たまるもので、見つけるたびに喧嘩を売っていた。
「よし、レベルアップだ！」
レベルが５ほど上がったところでソーンが話しかけてきた。

「そろそろ洞窟にでも行ってみるか？」
洞窟・・・。
ソーンですら突破が困難と言われる洞窟。
「遠慮しておきます」
「なに、実際に突破はしないさ。様子見程度だ」
・・・じゃあ、頑張ってみるか。

と、言うわけで入ってみた。
真っ暗。
視界には全くと言っていいほど何も映らない。
「魔術師のひとりでもいればなぁ」
「魔術師ねぇ」
魔術師は攻撃魔法以外にもなんだかんだでいろいろできるようだ。
初耳だ。
「あ、僧侶だった」
僧侶かよ！
「とりあえず松明をつけよう」
ソーンはカバンをあさる。
「よし、見つけた！」
「あれ、買うの忘れたってオチは？」
「期待していてくれてありがとう。残念ながらさっき拾ったからそれはないんだな」
・・・逆にいえば拾わなかったらそのオチだったんだな・・・。

それなりに進んだが、モンスターは見当たらない。
ソーンは珍しいとばかり言っているが。
「・・・もう直ぐ出口なんだけど」
「え？」
「初めてだな、ここまで来たのは」

ソーンが一応大剣を構えながらゆっくりと出口に近づく。
オレも続いて銛を構える。
「・・・あいつは！」
出口を出た矢先に少年が巨大な・・・ミノタウルス？
まあ、それっぽいやつに襲われていた。
「少年、ご愁傷様です」
助けろよ！
「と、言ってもこんな銛じゃ勝てる気がしない」
「だよな、あんな俺たちの身長くらいの斧なんてな」
二人で大笑いしながら洞窟に引き返す。
「おい、助けろよ！」
少年に呼び止められた。
オレとソーンは凄まじくやる気のない顔を少年に見せつける。
少年の身なり・・・盗賊か。
「ふう、仕方がない」
ソーンは大剣を構えなおす。
オレも便乗して銛を構えなおす。
「見事に助けたら金とるからなー！」
死んだら全財産の半額を奪われるからな。
デスルーラしてる間は別にかまわないがそれなりにお金を持っていれば全滅・・・ってか死亡はしたくないだろう。
助けて、って言ってるからにはデスルーラは実施してない様子。

さっそく襲いかかるミノタウルス。
ソーンの大剣が斧を抑え、オレはチクチクと銛で刺す。
ダメージがまるでない。
絶対にソーンが攻撃した方が効率がいい。
少年は袋からアイテムを出した。
「それは！」
「爆薬袋だ！」

爆薬が詰まった袋をミノタウルスに投げつけた。
ヒットする直前、ソーンがバックステップ。
ミノタウルスの顔面に直撃し、爆発を起こした。
「この程度じゃやられないか」
なんかサハギンリーダーぶりに強いモンスターを見た。
爆発によって怯んだ隙にソーンは大剣でミノタウルスの右腕を跳ね飛ばす。
手に持っていた斧がゴロンと落ち、それをすかさずオレが拾う。
よっしゃ、新しい武器ゲット！
「「せやあああああああ！」」
オレとソーンは斧と大剣で残った腕と脚を跳ね飛ばした。
「やったな！」
「まて、まだ死んでない！」
少年がそう叫ぶと、一本しか残っていない足で地面を蹴り、角で突っ込んできた。
なんて執念深いんだ！
オレたちはそれぞれの得物・・・まあオレは奪った奴だけど、それで身を守り、急な一撃を耐えきった。
攻撃態勢に移ろうとするミノタウルスに少年は爆薬袋を投げつける。
わずかな隙を見切ったいい攻撃だ。
爆音とともにミノタウルスが倒れた。
「・・・よし！」
オレたちはみんなで拳を合わせて勝利を喜んだ。

「ミノタウルスのせいで洞窟にモンスターがいなかったんだな」
そんなに強いモンスターだったのか。
「ま、これで依頼は完了。礼を言うよ」

「依頼だったのか」
「よく一人でやる気になったものだ」
「いや、ひとりじゃないよ。ほら」
少年の指差した先には三つの屍があった。
「・・・・」
「・・・おお、こわ」
「それじゃ、パーティ死んだから入れてくれよ」
なんか少年が勝手に仲間になった。
ジョブはシーフ。
ちなみに盗賊系の職業樹形図は、

ランク１：シーフ
ランク２：シーフ→ローグｏｒスカウト
ランク３：ローグ→マスターシーフｏｒパイレーツ、スカウト→レンジャーｏｒトリッキー
ランク４：パイレーツ→エアパイレーツ、トリッキー→トリックスター
ランク５：マスターシーフ→バンデット、エアパイレーツ→コズミックパイレーツ、レンジャー→トレジャーハンター、トリックスター→マジックスター
ランク６：シーフ→ツールマスター

なんかインパクトが薄い。
ランク６のバーサーカーがあまりに強烈すぎるインパクトだったせいなのか。
ちなみに少年の名前はトレス。
スペイン語で３って意味だ。
以上！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1747h/

MMORPG的ななにか

2010年10月11日19時55分発行